

ロード・ベヴァリッジの大学理念とその実現

柏野健三

1. はじめに

EU統合について知見を深めるため、2010年9月6日から8日にかけて、UACES (The University of Association for Contemporary European Studies) の第40回Conferenceに参加した。ConferenceのテーマはEurope at a Crossroadsであり、EUの今後の進み方に関する基調講演とセッションが行われた。会場はBurggeのCollege of Europeであり、基調講演のみがMarktにあるHallenで開催された。Europeは、ギリシアの金融危機にもかかわらず、EU関係者や大学人は、更なる統合に向けて意見を交換していた。EUの実質的統合化の後にくるものは、世界の統合への動きであろう。統合は、経済のみではない。学問の世界においても進みつつあるというのが実感である。UACESは、その象徴的学会であろう。これからの我が国の大学においても、グローバル化の進展によって国内のみの閉鎖的環境から一段と門戸開放が世界から求められるようになると観測される。その備えは、各大学にあって十分取り組まれているのであろうか。世界水準大学とはどのような大学をいうのか。今一度、大学とは何かの原点に立ち戻り、世界水準大学の地位を築くためにどうすればよいのか。モデル大学にはどのような大学があるのか。それも長い歴史を有する大学ではなく、日本の歴史でいえば、明治維新时期に設立された大学で、現在世界的地歩を固め、ノーベル賞受賞者が輩出している大学が望ましい。世界的レベルでそのような大学を探して見ると、1895年に設立されたロンドン大学London School of Economics and Political Science (略称LSE) がモデルとして相応しい大学の一つに数えられることがわかる。その理由はBeveridgeが学長に就任した1919年には、たった3名の専任教師のみで運営されていた大学が、彼がオックスフォードへと去った1937年には37名の専任教員を抱え、そして1956年には182名の専任教員を抱えるまでに成長して、ノーベル賞の受賞者が16名輩出(2008年まで)しているからである。

私見であるが、筆者のこれまでの大学勤務からして、一般的にモデル大学として推奨できる大学には以下のようにいくつかの特徴があると考えられる。

1. 国家・社会の発展に貢献すること。
2. 大学設置理念・設置目的が明確であること。
3. 理念・目的実現のための組織が整備され、スタッフが配置されていること。

4. 理念と目的を実現するため、大学としてのスペースと設備が確保されていること。
5. 理事・教員・事務員の間で世界水準大学にしようという意気込みがあること。
6. 研究を促進しようとする意欲に満ち、そのための体制が整備されていること。
7. スタッフが教育に対する情熱を備えていること。
8. 潤沢な予算があること。
9. スタッフの給与・福利厚生がトップクラスであること。
10. スタッフの質（研究・教育能力と事務遂行能力）が高いこと。
11. スタッフの人間の魅力があること。

大学がこれらの条件を備えるためには、学長のリーダーシップが望まれることは言うまでもない。そして、学長に対してこれらの条件を整備することが強く望まれるのである。特に重要な要件は、理念、組織、資金、そして人材ではないだろうか。

いくつかの大学では、既に着々とグローバル化への準備を進めていると聞く。未だ、方針が未定の大学もあるかもしれない。それゆえ、本稿は、我が国の大学の発展に資するため、Lord Beveridge (1879~1963) やRalf Dahrendorf、そしてJose Harrisの著作をもとに、Lord (William) Beveridgeおよび彼の協力者がどのようにしてLondon School of Economics and Political Science (LSE) を発展させたかを検証することである。BeveridgeがどのようにしてLSEを発展させようとしたかを検証すれば、大学発展のために何が必要とされるかを理解することができるであろう。

LSEは、1895年、Webb夫妻等によって設立された。LSE設立に関する協議は、1894年8月4日、サリー州Godalmingに近いBorough Farmで行われた。その協議に参加したのは、Sidney Webb, Beatrice Webb, Graham Wallas, そしてGeorge Bernard Shawの4であった。3名の男性は10年以上にわたって周知の間であり、Fabian Societyという名で設立された政治的クラブを兼ねた‘think tank’の結社(junta)のメンバーとして活躍していた。その日、SidneyはDerbyの事務弁護士からの書状を紹介した。その内容は、フェビアン協会支持者であるHenry Hunt Hutchinsonが遺産20,000ポンドをフェビアン協会と社会主義のために寄贈するというものであった。20,000ポンドは100年後の約100万ポンドに相当する。協議の結果、遺産の一部は、Hutchinson家族に残されたが、少なくとも残りの10,000ポンドがLSE設立資金として充当されることが決定されたのである¹⁾。LSEの目指す大学とは「特別テーマに関する講義のセンターのみでなく、オリジナルな仕事をするよう方向づけられ、支援される団体」²⁾であった。その意味で、SidneyはÉcole Libre des Sciences Politiquesに大きな印象を受けていたものと思われる。³⁾

LSEを誕生させた知的影響力の分野を構成したのは、5つのE (five Es) であった。それらとのEとは、Education, Economics, Efficiency, Equality, そしてEmpireであった。⁴⁾ そして、思想的に大きな影響を与えていたのは、Alfred MarshallとGladstoneであった。創設者Sidney

Webbは、英国的社会主義の実現を目指し、national minimumを提唱したが、同時に大英帝国の繁栄を願っていた。そのために必要な要件として教育、経済学、能率、平等が考えられたのであろう。日本国においても、当然のこととして、国家の発展に貢献しない大学は、その存立を許されないのはいうまでもない。

2. 初代学長からベヴァリッジへ

Bevridge時代に入る前に、なぜ彼が学長として招聘されたかを理解するため、彼の学長就任にいたる以前の歴代の学長に言及することにしたい。初代学長（1895～1903）にはWilliam Hewins（1865～1931）が就任している。Hewinsは、学長職を喜んで引き受けているわけではない。彼は、就任にあたり、関係するChamber of CommerceをLSEは政治的に中立であると説得しているからである。しかしその一面、特定のグループに対しては、集産主義者として演説しなければならないことや、LSEの経済学が集産主義のバイアスを持たなければならないことを伝えられている。⁵⁾

2代目の学長（1903～1908）は地理学者のProfessor Halford Mackinder（1861～1947）であった。Sidney Webbが彼を推薦したのであったが、その任命はロンドン大学理事会が承認しなければならなくなっていた⁶⁾。では、地理学者であるMackinderがなにゆえにLSEの学長に任命されたのであろうか。多極主義者であった彼は、当時既に関係学会では著名であり、Beatriceの彼に対する最初の印象は、非常によいものであった。Beatriceが賛同すれば、Sidneyはこれを拒否することは難しく、またその逆も困難であった。2人は、年齢の差や誕生日の違いがあるにもかかわらず、同じ日に生まれたとして誕生日の記念行事を行っていた。そして、2代目学長の時期に大蔵省から£250の最初の助成金を受けたことが特筆されねばならないであろう。⁷⁾ LSEは、国家によってその存在を認められたからである。

3代目学長（1908～1919）がWilliam Pember Reeves（1857～1932）であった。Reevesは、なぜ学長に任命されたのであろうか。Mackinderの学長辞任が突然であり、その後継者の選定には時間がなかったこともReevesには幸いした。ある意味では、フェビアン協会に関係があり、ある程度の社会的評価があるということからReevesはLSEの学長に任命されたのである。彼は、LSEの学長のタイトルと同じくNew Zealand National Bankのdirectorも兼ねることになった。最初、Beatriceは、Reevesの給与700ポンドの提案には賛成するなど、彼の任命に決して反対しているわけではない。しかし、Reevesに対してBeatrice WebbのReeves評は、決して好ましいものではない。彼女は次のように述べている。「彼は、英国の政治において陳腐となり、悲しい愚鈍な精神と目的に落ち着いている。」⁸⁾ 辛辣な評価といってよい。そして、Reevesの学長辞任は、LSEの運営に対する真摯な態度の欠如によるものであることが理解される。さらに、このReevesは学長の職務遂行、LSE運営にあたり、Webbを抹殺しようと試みている。

抹殺とは誇張した表現ではあるが、WebbがLSEの運営に干渉しようとするのを防ごうとしたのである。⁹⁾ 創設者を大学運営から除こうというのであるから、余程勝算がない限り、本来は踏みとどまるべきであるが、この企みは、Miss Mactaggartによって確認されている。彼女は、LSEにおいてはBeveridgeが学長に就任する以前に在籍しており、その影響力は甚大であった。彼女がそのように発言する限り、Reevesの試みは、LSEに緊張関係を引き起こす。ReevesとMiss Mactaggartも良好な関係ではなかった。Reevesの運営において批判されるべきは、経費削減に彼の方針が偏っているというものであった。さらに、彼の短気な性格は評判となっている。¹⁰⁾

組織における経費削減は、余程の大義名分がない限り困難を極める。組織が借財を抱えているという深刻な要件さえも、組織の構成員からは無視されてしまうのが通例である。日本国の江戸時代においても、薩摩の調所広郷や土佐の野中兼山の財政政策をみれば、その結末は悲惨というほかはない。改革者は、失脚の運命をたどることが多い。

さて、Beatriceの評価が低下すると、LSEの学長としての職務遂行には困難さがつきまとうことになる。Reevesも例外ではなかった。優れた大学とは、どのような大学を言うのであろうか。一つには、一つの部分からは構成されないこと。二つ目には、用語の訓練のための三流の訓練校を目指さないことではないであろうか。第1に言われていることは、偏らないということであろう。これは、学問の分野のみでなく、大学事務分野にもあてはまることであるかもしれない。そして二番目は、常に目線を高くし、大学とは何かを常に考えている大学のことである。この意味において、Reevesは、LSEの学長としては不適であることが徐々に露呈されざるをえなくなったのである。1919年当時、LSEの学長就任にあたっては、SidneyやBeatriceのほか、LSEのChairman of Governorsの同意が必要であった。当時のChairman of Governorsは、Steel-Maitland (1876-1935) であり、ウェブ夫妻と良好な関係であったことが知られる。

3. ベヴァリッジは、なぜLSE学長として招聘されたのか

ベヴァリッジは1919年10月1日、LSEの第4代学長に就任するのであった。ベヴァリッジは、LSE創設者によって、概ね筆者があげた大学発展のための諸条件を整備する学長と考えられていたといってよい。つまり、何よりも大学理念実現のための資金獲得が期待されていたといえる。資金がなければ、施設整備、スタッフへの俸給支払い、優秀なスタッフの獲得も不可能となる。

ベヴァリッジとLSEの関係は、その時から始まったわけではない。既に、ベヴァリッジは、トインビー・ホール時代の1903年LSEの臨時聴講生であった。そして当時の学生組合から、「大学セツルメントの影響」と題して講演を依頼されている。つまり、この頃からベヴァリッジは社会問題について自らの見解を整然と述べる訓練を終えていたようである。彼が取り上げ

た内容は、「セツルメント活動がその居住者に及ぼす影響」であった。そしてそれから30年後、彼は「大学セツルメントは、生涯の居住地ではなく一時期を過ごす学寮と考えるべきだし、人間性を学ぶための大学院の教育の場であるべきである」ことに気づいている。¹¹⁾ ベヴァリッジは、Harry TawneyやRichard Livingstonとともに、トインビー・ホール時代に大学改革に参加しており、この当時から大学運営に対する関心が芽生えていたということがいえるであろう。1905年10月25日付の母への手紙の中で、ベヴァリッジは「私はいつの日が教授になろうと思っているのです」¹²⁾ と述べている。

そして1904年、ベヴァリッジは彼の生涯を通して交流する人々に会おうことになるのである。最初は、Herbert Llwellyn Smith、次にSidney WebbとBeatrice Webb夫妻、最後にDavid Mair, Jessy Mairと彼らの子どもたちであった。Smithは、彼が商務庁職業紹介局長時代の上司であり、Webb夫妻は、BeveridgeをWinston Churchillに紹介するとともに、彼をLSEの学長に推挙した人々であり、Mair夫人は、後にBeveridge卿夫人となっている。その意味で、このトインビー・ホール時代の人間関係は、彼のその後の人生を決定したといっても過言ではない。

ベヴァリッジが赴任した頃のLSEに大きく影響を与える三つの進展があった。Beveridgeによると、一つは、商業学位（Commercial Degree）の確立プランである。商業学位プランの精神の持ち主は、Sir Sidney Russel-Wellsであった。彼は、1919年副総長に就任し、大学理事会（University Senate）のメンバーとして3年間その地位を保持した。彼自身は、臨床医学部の講師であったとはいえ、彼は教師としてではなく、卒業生の推薦を受けて評議会（Convocation）代表として理事会の一員となっていた。つまり、彼は学内理事というよりはむしろ、大学講師でありながら、外部の利益を代表する学外理事としての働きを期待されていたわけである。外部学生が学位試験を受けた場合、公正な扱いをすべきであるとの主張をもっていた。しかし、大学内部と対立するような行動には出ていない。特に、LSEとは良好な関係を保持していた。LSEにおける商業学位のためにLSEを支援したのは言うまでもない。

実は、この商業学位推進の背景には、Sidney Webbの「商業に関する高度な学校」（High School of Commerce）への思いがあった。Sidneyは、1897年、技術教育に関する国際会議（International Congress on a Technical Education）において「商業に関する高度な学校」の開設について講演しているからである。Hewinsも英国のビジネスに対する責任の上からもスクールにおける商業教育を主張していた。¹³⁾ ここで、明白にいえることは、大学教育は、国家社会のニードの上に初めて存立を許されるということである。大学は、世俗的であってはならないとの主張は、裏を返せば、大学が社会的真空状態の中でも存在できるという主張と同じことを意味している。世俗の要求をいかにエレガントに整理して実現方策を提供するかが、大学の存在要件の一つである、と筆者は常に考えている。個人の研究所と大学の違いは明白なのである。

第二は、Sir Ernest Casselによる多額の寄付があったことである。寄付金は、信託財産によって管理されることになった。議長はLord Haldaneであった。1920年、商業学位の基金として、さらに現代言語と奨学金の助成金として15万ポンドがこの基金から充当されることになった。多額の資金がなければ、大学を発展させることは不可能である。Sir Ernest Casselからの多額の寄付は、ベヴァリッジ学長にとってまさに幸運の象徴であったといえる。理念のみでは、目的は成就されない。潤沢な資金がなければ、優れた研究と教育を推進することはできない。

第三に、ビルの増築が期待された。1913年の時点で、スクールの宿泊設備について不適切で、非常に過密であるとの報告があったが、1920年の時点においてはさらにひどいものとなっていた。なぜならば、1913年に比較して学生数が1倍半に達していたからである。¹⁴⁾

これらの進展を背景として、ベヴァリッジが学長として取り組まなければならない課題は、就任時において早くも明確となっていた。研究・教育のためのスペースの拡充と教育にあたる常勤教員スタッフ確保が喫緊の課題となっていた。しかし、問題は、これらのみではなかった。図書館司書の俸給問題、読書会、サマー・スクールの問題があった。1919-20年、学生数は初めて3,000名を超えている。

スペースの問題として図書館や研究室の整備不足があげられる。3,000名の学生数に対して図書館の読書席は、わずか50席であり、これでは大学図書館の体をなしているかどうか、疑わしいものがあった。教員の研究室も不備であった。ベヴァリッジによると、Foxwell教授は講義の準備を教師談話室でおこなっていたということである。また、Theodore Gregoryも研究のために、助講師談話室に戻らねばならなかったということである。LSEにおけるスペースの問題は、LSEの発展に大きな影響を与える因子ではあるが、ベヴァリッジは先ず、常勤教師の確保に向けて動き出すことになる。

大学の水準を維持するために常勤教員の確保は欠かせない。それも、優秀な教員が必要となる。ベヴァリッジは、この点を重視している。彼とメア夫人のみでは、LSEの運営は不可能であるからである。彼が学長に就任した時点（1919年10月1日）で、3名の上席教員が在籍していた。日本国の大学設置基準から言えば、到底設置認可が下りない状況であった。その3名とは、統計学のBowley教授、商業学のSargent教授、経済史のLillian Knowls准教授であった。非常勤講師としては、非常に著名な研究者が含まれている。Cannan, Lowes Dickinson, Pearce Higgins, Hobhouse, Mackinder, Mantoux, Seligman, Lees-Smith, Urwick, Wallas, Westermarck, Wolfがあげられる。著名な教授とはいえ、常勤ではないことから、大学運営に携わるには限界があったが、教授会はこれらのメンバーを含めて年2回のみ開催されていたようである。¹⁵⁾

ベヴァリッジは、このようなLSEの状況下において学長就任を要請されたのであった。3代目学長任命にあたり、3名の候補者が候補にのぼった。Sir Theodore Morison, A.L.Bowley, そしてSir William Beveridgeであった。Morisonは、年齢と気品の点で不向きであり、Bowley

は、LSEの士気にとって長く基軸人物であり、同時に尊敬され、好意を持たれていたが、おそらく学長職を引き受けそうにはなかった。BeveridgeについてBeatriceはLSE総長Steel-Maitlandに手紙を送り、欠点はあるが、彼に代わりうる者がいないということでBeveridgeの学長任命に同意している。Beatriceによれば、彼の見解は、反労働党で、集産主義に賛成し、革新者であり、因襲的精神の持ち主ではないと評価している。かくして1919年5月17付のBeveridgeへの手紙の中で、Sidney Webbは彼に対してLSE学長就任を打診したのであった。¹⁶⁾

Jose Harrisは、Beveridgeが学長として推薦された理由について以下の点をまとめている。¹⁷⁾

- 1) Beveridgeは、Sidney WebbにとってLSEに対して大規模で急速な拡張時期のために必要な才能と展望をまさに提供すると思われた。¹⁸⁾
- 2) 彼は、高度に能率的な組織者である。
- 3) 彼には世間の注目を集めようとする本能がある。
- 4) 彼には公務員との幅広い接触がある。
- 5) 自己責任の能力を備える。
- 6) 経済学と政治学におけるより公式な訓練ニードに対するWebbの信念を共有している。
- 7) 1900年以来Webb夫妻が開拓者となっている「現代研究」の強力な提唱者である。
- 8) LSEのパート・タイムの学生であった。
- 9) 早くも1906年スタッフのポストを与えられていた。¹⁹⁾
- 10) 同時に、彼は強力な知識人である。
- 11) 平等で確かな基盤で大学人、政治家、および公務員を扱うことができる。
- 12) 失業に関する彼の研究は「今世紀の経済学にとって最も見事で独創的な貢献」である。²⁰⁾

これらの特徴の中で、学長として最も期待される点は、施設・設備を重視する能力、運営のための組織整備とその運営能力、資金の獲得と宣伝のために各界において著名であること、学問的訓練に対する情熱があること、学問分野において地歩を占めていること、研究に対する理解があること、教育に対する著しい情熱があること、などであろう。Beveridgeは、この時点でこれらの能力や傾向を備えていたものと思われる。BeveridgeがLSEの学長に就任するにあたって、トインビー・ホール時代以来の経験が大きく役立っていることは否定できない。知識に基づく権力の行使の考えは、既にオックスフォードの学生時代に彼にそなわっていたものと思われる。²¹⁾ Beatriceの懸念もあったが、Sidneyの選択によってBeveridgeの学長任命は確たるものとなった。(Beatrice Webbは、Beveridgeについて「彼には欠点がある。彼の見解はわずかに反労働党であるが、集産主義に賛同している。彼は、革新者であり、因襲的精神の持ち主ではない」と述べている。)²²⁾ つまり、Beatriceは、思想ではなく、Beveridge自身のなかに人格の欠点 (flawed personality) を見たのである。²³⁾

人格の欠点を内に蔵して行使する権力の行使は、時として権力行使者の自滅を招くこともある。ベヴァリッジは、1937年それを味わうことになる。

4. 敷地（スペース）の取得と設備の充実の経緯

大学の発展にとって重要な要件は、既に列挙したところであるが、紙幅の関係から本稿においては、資金の獲得、スペースの確保と学舎の建設、優秀な教員の確保、そして高度な教育内容を含む学生ニーズの充足に限定して述べることにしたい。大学の発展にとってスペースの確保と設備の充実は、大学発展の死命を制するといっても過言ではない。LSEがBeveridgeに期待したことの一つは、敷地の取得であった。では、Beveridgeはどのようにして敷地の拡大をめざしたのであろうか。詳しくは、Beveridgeの自伝『強制と説得』や『ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 激動の18年 1919-1937』に述べられている。彼が学長就任以前に、既にこの計画は決定されていた。この計画を推進したのは、Sidney Webb, Sidney Russell-Wells, 及びLord Haldaneであった。Beveridgeは、自伝の中で「建物は、教育の仕方とおよび教授同士、教授と学生との関係を変える唯一の手段であった」と彼の建物原理を述べている。1920年5月28日、国王ジョージ5世によって礎石が据え付けられた。²⁴⁾ 計画を実現に移すためには、豊富な資金、そして絶え間ない実行が伴われなければならない。²⁵⁾ 特に、利害の絡む計画の実現は、時に命と引き換えねばならぬこともある。

この拡張ための敷地価値は、5万ポンドと評価されている。取得のための資金として、経済界からの寄付である商業学位基金から75,000ポンド、大蔵省、すなわち補助金委員会（University Grants Committee）から45,000ポンド（1920年、新しく創設された大学補助金委員会が訪問し、著しい評価を与えられた）、ロンドン・カウンティ・カウンスルから15,000ポンド、LSEの準備金から5,000ポンドが拠出された。かくして学舎の費用は、14万ポンドと評価された。Beveridgeにとって最初にすべきことはスペースの確保であったことから、彼はさらにClare Marketに新校舎を建設すべく、25,000ポンドの費用を見積もった。²⁶⁾ そしてUGCの補助金によってClare Market Buildingが完成したのは、Adams学長の時代（1967-1974）であった。

しかし、問題はこれのみではなかった。LSEの敷地を拡張するためには、Houghton Streetに面する隣接の用地を取得しなければならなかった。まず、廃屋となっているRed Lionのパブを解体し、新たな校舎を建設することであった。所有権はLSEにあったが、入居者がいることから、LCCに解体許可を求めなければならなかった。解体許可の申請はメア夫人が行っている。ここでも彼女はLCC職員との人的関係を大いに利用したものと思われる。LCCには、メア夫人の知己であるPhilippa Fawcettが要職に就いていたからである。1920年解体許可を申請し、同年2月に許可が下りている。²⁷⁾

Houghton Streetに位置する残りの建築物の撤去もBeveridgeの手中に任せられた。St. Clement's Pressの所有する建物と、八つの小さな家の撤去問題であった。これらの建築物の撤去申請をLCCに提出したのであったが、1920年に申請されて以来、1923年までLSEは、この問題に関して何も活動できなかった。しかしながら、1924年、ついにベヴァリッジは行動を開

始した。教育長官を含むLCC幹部のLSEに対する同情論の高まりは、ベヴァリッジの行動を後押しすることになった。当時の教育長官（President of the Board of Education）Charles Trevelyanは、教育目的のためであれば、強制購入も許されてよいのではないかと発言し、彼の部下である法律担当のW. R. Barkerと財政担当のValentine Brownの2名は、London County Council（LCC）が、Borough Councilによれば、優れた大義のために強制的購入を認める条項を一般権限法案（General Powers Bill）に含められると指摘したことによって、この問題の解決に対する兆しが見えてきたのである。²⁸⁾ LCCは、強制購入に関して権限を有するのみでなく、資金面でもLSEに影響を与える存在であった。LSEが頼らなければならない財源には三つの種類があった。授業料、LCCの技術教育庁（Technical Education Board）のような機関からの助成金、そして寄付であったからである。²⁹⁾ ここから地域関与（Community involvement）の重要性が生まれてこざるを得ない。メア夫人による地域を巻き込んだ演奏会などは、その優れた交流の場を提供することになった。そして、LSEの名声を高めて、LSEの更なる発展のためにもLCCとの協力は不可欠であった。

さて、強制購入に関するLCCの意向を受けてBeveridgeは、L.C.C.の首席教育担当吏員（Chief Education Officer）のSir George Gaterに4日間にわたってLSEの立場を説明し、申請した。これを受けて、L.C.C.はHoughton Street視察のために代表団を送り、強制購入を一般権限法案の中に含めることに同意した。³⁰⁾ この意味において、学長は、手ごわい交渉者（tough negotiator）の素質を備えなければならないということになる。大学には著名な研究者が必要であるが、同時にベヴァリッジのような交渉人の存在が不可欠なのである。学長には、研究能力よりもむしろ交渉能力が求められるのである。

しかし、学舎購入資金をどのように調達すべきか、という次の懸案が横たわっていた。先ず、商業学位機関の理事長J. Wilson Porterは、LSEに対して献身的働きをしている。ロンドン市議会（London Senate）に対し、7,000ポンドの商業学位資金を校舎購入資金として譲渡することを説得した。しかし、7,000ポンドの資金では校舎建築資金は十分ではなかった。では残りの資金をベヴァリッジはどのように調達したのであろうか。幸いなことに、第一次大戦後の繁栄するアメリカにあってLaura Spelman Rockefeller Memorialにおけるベヴァリッジの友人を通して、資金援助の見通しをつけるのであった。1925年8月7日、一般権限法案は、LSEに有利な6条を加えて国王の裁可を得ることができた。後は、L.C.C.の強制執行があるのみであったが、これは極めて難航することになった。³¹⁾

St. Clement社はストリートのコーナーにある建築物を残したが、それを14,000ポンドで売却したいとの希望をLSEに伝えている。しかし、Beveridgeによれば、資金は11,000ポンドを上限としていたため、残りをどうするかが緊急の課題となった。ここでSir William Berryの登場によって3,000ポンドの資金が彼と彼の兄弟から提供されることになり、14,000ポンドが充当可能となった。しかし、購入した後が問題なのである。その後、Beveridgeの努力によっ

て、1927年、LSEはついにHoughton Streetの七つの建築物を手に入れることに成功した。1928年、LSEは8年前の14,000平方フィートに比較して全体で78,000平方フィートを計算上獲得することになった。³²⁾ 現在、Houghton Streetに面して本館が建築されており、玄関が備えられている。

1923年から1937年にかけてLSEの全体スペースは、51,000平方フィートから134,000平方フィートに増加した。図書館やセミナー・ルームは5倍半に増加し、教員室のスペースは4倍を超えた。Beveridgeによると、彼は学長就任後の12年間、常に学舎建築を思っていたとのことである。学舎建設理念は、何のための学舎かという一点に尽きる。Beveridgeは、「大学生活が教師と生徒の個人的関係を必要とする」³³⁾ と考えていた。従って、彼はセミナー・ルームと教員室にこだわったのである。確かに、学長としての彼の見解は適切であると言わねばならないであろう。学生はゼミによって鍛えられる。担当教員と直接議論することによって、思想は深められ、社会や人生に対する一定の見解をもつことができるからである。

5. スタッフの待遇改善

Beveridgeによれば、LSEは、ロンドンにおいて常勤教授のために年間最低俸給として1,000ポンドを確立した最初のカレッジであった。最初に、この額を基準として採用された教授はA.L.Bowley (1869～1957) とA.S.Sargent (1871～1947) であった。公式には、Beveridgeが学長に就任する以前ではあったが、ベヴァリッジの意向が強く働きかけられていたことがわかる。Bowleyは、経済統計学者であり、社会調査においてサンプリング技術活用の開拓者として著名である。特に、『統計学の要素』(*Elements of Statistics*) は、英語で書かれた最初の統計学の著書とみなされている。Sargentは、経済学や商業学の分野で著名であり、商業学の教授として招聘されている。彼は、LSEの学生 (1896～9) であり、1898～9, 1902～1919年、既にLSEのスタッフであった。1898年、Sargentは経済史の教育スタッフとして加わった。

LSEは、さらに1925年、教師と上席事務スタッフの俸給に教育手当 (educational Allowance) を加えることを決定している。英国の他のカレッジでは未だ実施されていない手当であったことは特筆されてよいであろう。手当の額であるが、認可学校の全日制に在籍している13から23歳までの各児童に年間30ポンドとなっていた。しかし、LSEのすべての教師が、この手当に賛成していたわけではない。

更に、1927～8年、LSEは常勤教授の給与改正を実施している。給料表の改正に加えて、認可学校の全日制に在籍する児童が23歳に達するまで年間60ポンドを支給することに決定した。誕生から13歳までの児童に対しては年間30ポンドの教育手当を支給ことにした。これらの手当は、事務局スタッフにも適用されることになった。5年後には、用務員、食堂スタッフおよび他の雇用者にも給与の改善が実施されている。年金計画が実施され、小学校卒業後の施設

に定期的に通学している14歳から19歳までの児童を対象とした教育手当が支給されることになったのである。Beveridgeは、LSEのスタッフであれば、どのような能力であれ、考慮に値すると認識していたのである。³⁴⁾

大学における俸給率は、大学の死命を制すると言っても過言ではない。高い俸給を支払わなければ、有能なスタッフは集まりにくい。そこで、LSEの理事会は、この問題について1928～9年、以下のような結論に達している。

「全体として採用される年金俸給率は、比較可能なロンドンのカレッジのいかなる率よりも確かに良い。そして英国のほとんどの大学の率におそらく匹敵する。しかしながら、理事会の見解においては、社会科学の分野におけるスクールのユニークな地位を考慮すると、専門職の俸給は、彼らの話題において顕著に卓越したスクールの教師を引付けることが絶対に必要である。」³⁵⁾

理事会のこの結論こそ、LSEがノーベル賞受賞者を引き付けた根拠の一部を構成しているものと思われる。英国一の俸給、さらには世界一の俸給を目指すことが、世界一の大学へのパスポートではないかと思われる。この時点において、LSEは、年間1,500ポンドの俸給で2名の教授を雇用していた。Beveridgeは、上記の結論からさらに推論している。5年後には1,000ポンドから1,250ポンドに引き上げることが望ましい。適切な理由があれば、俸給表に拘束される必要はないとの見解ももっていた。つまり、優秀な教授に対しては高額な俸給を支払うことにより、LSEにとどまってもらえばよいのである。この結果によるものと思われるが、LSEの統計によると、常勤講師の数は、1919年の17から1937年には79名へと増加している。

6. 学生のニーズにいかに対処したか

大学の発展にとって良質な教育の提供を含む学生ニーズに速やかに対応できるかどうか、大学の死命を制することになる。Beveridgeが学長に就任した1919年と1936年を比較してみると、学生数は約3,000名であり、数においてはほとんど変化がない。しかし、学生数の性格には変化が見られる。Beveridgeの学長時代の始まりの時期において2,000名の学生がパート・タイムの学生であったが、彼の学長時代の終わりには1,000名がパート・タイムの学生となっている。つまり完全コースの学生が圧倒的に増加していることがわかる。これらの学生はどのようなニーズをもっていたのであろうか。確実に言えることは、優秀な教師の指導を受けたいことであろう。その他、研究促進のための図書館の整備、福利厚生施設の整備などがあげられるであろう。

では、これらのニーズに対してBeveridgeやMair夫人はどのように対処したであろうか。Beveridgeは、「概ね、3,000名のうち、各学生が授業、図書館、食堂、談話室、運動場を要求し、そしてさらに多くの設備が、私の学長時代の初めから終わりまで彼らの要求を満たすため

に準備されなければならなかった」³⁶⁾と述べている。

大学連合の学生に加えて、海外からの留学生も彼の任期中に増加している。1919-20年には291名であったが、1936-7年には717名となった。LSEが常に国際的にアピールしていたことがわかる。大学連合にしても、留学生にしても、現在の日本では盛んに取り組まれているが、既に英国においては1919年には盛んに行われようとしていたことが分かる。男女の比率も学生のニードに対処するには考えなければならない要因である。

BeveridgeとMair夫人は、学生のための完全な大学生活が二つの種類の個人的触れ合いに左右されることを自覚していた。個人としての教師と個人としての学生である。一人の学生と他の学生の触れ合いにも2には力を入れている。学生自治会(Students Union)は、その意味で学生同士の個人的触れ合いの場を提供する。会議、議論、多くの種類のクラブを組織したのもLSEの学生組織であった。教育組織の一環としても学生自治会を育成することを目指す彼らの姿勢には同感できる。LSEにおける生活のための全体的に重要な設備が必要とされた。完全な討論のための講堂、学生数に応じた十分な食堂、談話室およびクラブ之会合のための部屋がこれらであった。³⁷⁾

学生と教師の触れ合いを確保するためには、より多くの教師が必要であり、彼らに支払う給与財源が確保される必要がある。さらに、研究促進や学生と論議するためにも、常勤教員には研究室が確保されなければならない。Beveridgeは、教師と学生との触れ合いを促進するために勉強アドバイザー制度を導入した。そして8名から12名のグループを編成し、教師の指導を受けさせ、優秀なエッセイに対して学長賞を出すことを彼は申しでている。しかし、この計画はすぐには実施されていない。抵抗があるからであろう。そこで、この計画は、Beveridgeが学長であった4期1923-4年以前には実施されていない。教師の間でBeveridgeが何をしようとしているのかが、理解されなければ人は動かないからである。LSEで導入されたテーマは、経済学と政治学であった。

第一学年のアドバイザー制度は、学生のすべてのニーズを満足させることにはならなかった。更にLSEの学生に必要とされたのは、運動競技とその競技を行う場所であった。都会にあるLSEにあって、どのようにして運動場を見つけ、しかもそれを日常的にどのように使用できるかであった。これは、Beveridgeにいわせると、コミュニティとしてのLSEは何をどのように準備しなければならないかということでもあった。つまり、学生は、Houghton Streetで出会い、そして別れてゆくにあたって学生がLSEの同窓生の一員であることを誇りにすることがLSEの発展につながるのである。

LSEでは、学生ニードを満たすために記念週間が開催されている。1922年の記念週間に何が実施されたか。LSEの年次報告、著名人の演説に加えて、Maldenにおけるクリケットとテニス、学生による演劇、そしてダンス、最初のスクール・ディナーが開催されている。このディナーは、1930年、ミカエル学期の終わりがよいことが決定された。Beveridgeは、学生自治会

の幹部をディナーや小規模のレセプションに招待して、学生との交流に積極的であった。³⁸⁾ 学長として、自らの大学の学生がどのような期待をもってLSEに入学してきたか、そしてまた学問研究するにあたって彼らの関心や彼らの知的水準を知るためにも学生自治会幹部とのディナーやレセプション交流は意味がある。

記念週間は、学生ニードを認識するためにも重要な週間であったと思われる。その行事の一環として記念講演が開催されているのであるが、1922年の最初の講演者としてH.H.Asquith (1852～1928) が招待されている。Asquithは、周知のごとく、自由党員であり、1908年から1916年にかけて英国の総理大臣としてLloyd GeorgeとWinston Churchillとともに、リベラル・リフォームとして老齢年金の導入、国民保険制度の確立、職業紹介所の整備、貴族院改革を推進している。

ベヴァリッジは、大学とコミュニティの良好な関係 (Community Involvement) を構築する一環としてメア夫人とともに、1925年以後、ランチ・アワー・コンサートを開催している。このコンサートは、ベヴァリッジが*LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*を脱稿した時点までは確実につついている。そして、メア夫人はジュシィ・メア・カップを授与することによって音楽を奨励している。コミュニティと大学との良好な関係構築には、様々な手段が考えられるであろう。大学の開放もその一つの手段であるが、明確な目的をもってコミュニティと交流することが求められるであろう。音楽会は、その意味において明確な目的を持ち、大学の品性を維持する点でも文化度が高いといわなければならないであろう。メア夫人の芸術的レベルの高さがしのばれる企画ではある。

更にベヴァリッジとメア夫人は、文学の奨励を促進している。つまり、Literary Societyを設立し、著名な関係人物とのレセプションを開催したのである。会長は、学長であるBeveridgeが就任した。では、どのような人物がレセプションに招待されたのか。学生はもちろんであるが、これだけでは意義あるレセプションとはなりにくい。そこで、Beveridgeは、著名な文学関係者をレセプションに招待している。一人は、Walter de la Mare (1873-1956) である。彼は、英国の詩人であり、短編小説の作者でもある。彼の最初の著書には*Songs of Childhood*があり、1921年の小説*Memoirs of Midget*は、フィクション部門でJames Tait Black Memorial Prizeを受賞している。次いでHarold Monro (1879-1932) が招かれている。彼は、大戦 (Great War) 詩人として著名である。Bloomsburyの詩集書店の創設者および所有者、さらに定期行物「詩とドラマ」(Poetry and Drama) の編集者でもあった。兵役に従事する「人間心理」を想像し、「いかに死にたくない若者が死んでゆくか」を理解する詩を残している。Calroline Spurgen (1869-1942) は、英国詩の教授であり、国際大学女性連盟 (International Federation of University Women) の初代会長 (1920-1924) であった。Bedford Collegeでの講義録が残っており、Chaucer, 神秘主義、Ruskin, ShakespeareおよびKeatsに関する研究で著名である。

この文学会は、1616年以前から1900年までの数世紀を通して影響を与えた詩を大声で読むと言う習慣を形成するのに役だった。その会は、メア夫人を交えて7月にはKensingtonで夕食会を催した。³⁹⁾

Beveridgeによれば、「学生は、学生であるのみではない。彼らは、親から離れ、親が与えている援助を必要とする若い人間である。」従って、彼らの生活上の諸問題にもできる限り対応できる体制の構築が必要とされる。この点において、メア夫人は学生部長として六つの貢献をしている。彼女から支援を受けたかつての学生から、彼女に宛てた賛辞の書簡が残っている。それらを紹介しよう。

- 1) 我々は常に、学部学生に対する彼女の親切を思い出す。我々2人は、特に文学会と、我々の結婚に際して彼女の友情とユーモアに感謝の恩義を彼女に感じている。
- 2) ベヴァリッジ卿夫人は、1933年LSEの貧困に陥った学生であった私に大変親切であった。そして私は、常に彼女に感謝している。
- 3) 私にとって彼女は、常に大学院生の日々の一部であった。
- 4) 私にとってジャネットは、私の学部学生時代の一部であり、Aveburyにおける友好的な温かい週末とともに、LSEでの素晴らしい時代の私の愉快的記憶の中で無くてはならない活発な要素の一部であった。
- 5) 私は常に、私に対する彼女の親切と、私の将来を決定するにあたって彼女が私に与えたすべての援助に満足している。
- 6) 彼女は、この国における私の初期の生活においてそのような大きな役割を演じ、私にそのような多くの親切を示したので、この理由の為にのみ、彼女の記憶は私にとって常に貴重となるであろう。しかし彼女は、彼女に会うことができた幸運をもったすべての人々に忘れ難い人格の持ち主であった。彼女はスクールの年代記の中で永遠に生き続ける。⁴⁰⁾

Beveridge学長と事務局長のメア夫人は、AveburyにあるBeveridgeの所有する「ウィルの家」(Will's cottage)へ学生とスタッフを招き、ハイキング、歓談、研究を楽しんでいる。⁴¹⁾

クラブ活動も活発に行われている。例えば、学生クラブの1922年のリストから、彼の意図が成功していることがわかる。Dr Hugh Daltonは、ボクシング・クラブ (Boxing Club) の会長として出現し、Sidney Caineは、チェス・クラブ (Chess Club) を組織した。Graham Wallas教授は国際研究サークル (International Study Circle) を主宰した。学長Beveridgeは、幾分最ももらしくないが、文学会の会長、同じく国家連合同盟 (League of Nations Union) として出現している。R.H.Tawneyは、キリスト教連合の名誉会長、Lilian Knowlesは経済史学会 (Economic History Society) の名誉会長としてリストに載っている。⁴²⁾ 学生自治会は、討論と交際の有用な機会を提供したのは言うまでもない。

学生に対する真摯な援助は、学生と大学との距離を一気に縮めることになる。特に、これか

らのグローバル時代において、海外からの留学生に対する援助は、国際親善と日本の品格の向上のためにも無くてはならない。個人的行動というよりは、大学という組織としての支援が望まれる次第である。時に、学生の中には貧困に陥ることも否定できない。そのような場合も、対処できる制度の構築が望まれるのである。

7. 結 び

Beveridgeとメア夫人は、懸命にLSEの発展のために尽力したことは、彼らの事績を見ればあきらかであろう。しかし、1934年から1937年にかけて、Beveridgeは、彼の人生のうちで最も不幸な時期を送ることになる。LSEの運営方法に批判が集中するようになったからである。反対派の教授たちは、外部資金の活用方法においてBeveridgeとは異なる意見をもつようになったことが、Beveridge追放の原動力となったことは否定できない。自らの研究を優先して資金配分を決定するようでは学長としての品位が問われることになる。学長たる者は、まず、組織のメンバーに研究資金を配分しなければならないのである。Beveridgesとメア夫人の運営方法において、特にメア夫人の自己主張が顕著に現れるようになったことも、Beveridgeの孤立化を招く要因となった。Beveridgeを支持する教授はHogbenとMalinowskiのみであった。彼らから見れば学問的立場がBeveridgeと同じく経験的研究であり、かれらの擁護者とみていたからであろう。しかし、1930年代、純粋理論の傾向が増大しつつあった。LSE内における彼の学問的立場は、少数派となっていたのである。少数派の学長に対して、教授たちは、Beveridgeを支援する気にはならないであろう。1933-4年のアメリカ訪問は、彼の自由資本主義市場が優れた能率を発揮するという彼の信念を破壊するにいたった。さらに、LSE運営をはじめ法定委員会への報告準備は、ついに彼の健康を蝕む結果を招来させた。

1935年、Beveridgeの友人Tawneyさえも次のような見解を残している。「もはやスタッフが「現在の問題」を研究することはできず、そして「ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスよりもオックスフォードに今日はるかに多くの自由がある。」⁴³⁾ 友人のTawneyさえも、LSEの危機的状況を察していたのであるから、Beveridgeとメア夫人がいかに孤立していかか想像できる。そして1936年、ウェブ夫妻は、彼らとのマジョリカ旅行の中で、Beveridgeが学長職を辞職する決意を固めているのを知るのであった。

Beveridgeとメア夫人は追放されたが、彼らがLSE施設の整備と拡充に果たした貢献と、優れた教授陣を引付けるために努力したことは特記されてよいであろう。しかし、時代状況の変化は、いつまでもBeveridgeを必要とはしなかった。人は、自らの利益に反する者を支持できないからである。Beveridgeの運営方法の中には、やはり官僚的体質が残っているのである。独裁は、能率的であるが、上下関係のない大学において、学長が権限を行使するには慎重であらねばならない。権力の行使は、組織の発展に貢献もするが同時に衰退を招くことも認識され

ねばならない。

注)

- 1) Ralf Dahrendorf, *LSE A History of the London School of Economics and Political Science 1895-1995*, Oxford University Press, 1995, 3-5.
- 2) Ibid., 5.
- 3) Ibid., 5.
- 4) Ralf Dahrendorf, op.cit., 25.
- 5) Ibid., 16.
- 6) Ibid., 72.
- 7) Ibid., 93.
- 8) Ibid., 109.
- 9) Ibid., 131.
- 10) Ibid., 131.
- 11) Lord Beveridge, *Power and Influence*, 1955, 29 (W.H. ベヴァリッジ著、伊部秀男訳、『ベヴァリッジ回顧録 強制と説得』昭和50年, 36)
- 12) Ibid., 33. (『同書』42.)
- 13) Ralf Dahrendorf, op.cit., 59.
- 14) Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 15-6. (柏野健三訳、『ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス 激動の18年』6-7.)
- 15) ibid., 19. (『同書』9.)
- 16) Dahrendorf, op.cit., 138.
- 17) これらの点については、Jose Jarrisの著作*Beveridge Autobiography*, 1977, 266 (柏野健三訳『ウィリアムベヴァリッジ (中)』1997, 142.の中で言及されている。同書の「訳者あとがき」の中でも言及されている。
- 18) 柏野健三『英国社会福祉政策の発達』ふくろう出版、2003, 23.; Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, (柏野健三訳, 「訳者あとがき」『ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス 激動の18年』96.
- 19) BP, IIa, WHB to ASB, 22 June 1906.
- 20) Letters of Sidney Webb to the Director, S. Webb to C. Mactaggart, 21 June 1919.
- 21) Ralf Dahrendorf, op.cit., 139.
- 22) ibid., 139.
- 23) ibid., 327.
- 24) Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 23-4. (柏野健三訳、『ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス 激動の18年』13)
- 25) Lord Beveridge, *Power and Influence*, 170. (伊部秀男訳『ベヴァリッジ回顧録 強制と説得』昭和50年, 214.)
- 26) Dahrendorf, op.cit. 142; Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 23. (柏野健三訳『前掲書』13.)
- 27) Lord Beveridge, op.cit. 22, 23 (柏野健三訳『同書』11, 13.)
- 28) Ibid. 24., 『同書』14.
- 29) Dahrendorf, op.cit. 92.
- 30) Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 24. (柏野健三訳『前掲書』14.)

- 31) Ibid., 25. (『同書』 14-5.)
- 32) Ralf Dahrendorf, op.cit.142.; Lord Beveridge, *LSE The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 26. (柏野健三訳, 『前掲書』 16.)
- 33) Ralf Dahrendorf, op.cit. 143; Lord Beveridge, *The London School of Economics and its problems 1919-1937*, 27. (柏野健三訳, 『同書』 15,16.)
- 34) Ibid., 46. (『同書』 32.)
- 35) Ibid., 47. (『同書』 33.)
- 36) Ibid., 31. (『同書』 19.)
- 37) Ibid., 34. (『同書』 22.)
- 38) Ralf Dahrendorf, op.cit.,146; ibid., 36. (『同書』 23.)
- 39) Lord Beveridge, op.cit., 38. (柏野健三訳 『前掲書』 26.)
- 40) Ibid., 43. (『同書』 29.)
- 41) Ralf Dahrendorf, op.cit.146.
- 42) Ibid., 146.
- 43) Jose Harris, op.cit. 303. (柏野健三訳 『前掲書』 195.)

Lord Beveridge and the realization of his ideas on university

Kenzo Kashino

Abstract

The aim of this article is to review the development of London School of Economic(LSE) by the leadership of Lord Beveridge. But my ultimate purpose is that through this review I want to contribute to the development of university in Japan. To review his achievement, I referred to the works of Jose Harris, Ralf Dahrendorf , Lord Beveridge and so on.

LSE was established mainly by Sidney and Beatrice Webb who wanted UK to be a British socialist state. To realize their ambitions, they advocated and promulgated their national minimum policy and established LSE. They recommended Lord Beveridge as the fourth Director of LSE and Beveridge was appointed as the Director 1 October 1919. He was expected to develop LSE as a leading school in the world. To develop university, it was required to establish a firm financial and physical foundation and to get many excellent professors. And many academic publications by its academic staff are also required. Moreover the school must meet with the need of its students.

Beveridge and Jessy Mair were aware that the campus life was dominated by two kinds of personal contact. One is the personal contact between professors and students. The other is students' contact each other. To realize this, they introduced the adviser system in LSE. And they established many student clubs.

But Beveridge was expelled out from LSE in 1937. Because from 1934 to 1937 the discontents of allocation of the fund from Rockefeller Foundation was prevailed. Beveridge was said to be outwardly opinionated and extrovert by Dahrendorf. The amount of allocation was to be said unfair. And confrontation of academic stance between Beveridge and his anti-professors including Hayek and Robbins was happened. Beveridge was become isolated. He decided to resign his post in 1936.

The administration of university is very hard. The Director and the President must be very cautious. Because among its academic staffs, some professors were more reputed than the director and the president.

Keywords : Director, firm financial and physical foundation, excellent professors, allocation of the funds, academic publications, campus life